SAYAKA CHIBA

千葉 清加のこれまでそしてこれから

ヴァイオリニスト・千葉清加さんは、「自分が音楽で救われた分を、今度は私から還元していける人になりたい」という思いを込めて、一つ一つの演奏会に心を尽くすプロフェッショナルな方です。インタビューの中では、過去を振り返りながら当時の気持ちを伺うことも多かったのですが、その度に清加さんが言葉を丁寧に選び、当時の感情を大切に伝えようとされる姿がとても印象に残っています。
普段から自分に正面に向き合ってこられたのだろうと感じられ、その誠実でまじめなお人柄が自然と伝わってきました。

インタビュー：2025年7月某日

ちょっとここでピアノに関するエピソードを

清加さんの楽器との出会いは2歳の時。ご両親とも音楽家ではありませんでしたがクラシック好きのお父さまの妹（←つまり清加さんの叔母さま）が「弾いてみる？」とプレゼントにくれた小さな楽器でした。

このプレゼントがきっかけで「ヴァイオリンがやりたい。」と言ったそう。
そしてヴァイオリンをやるなら、ピアノは必須！と2歳半からピアノをはじめ、3歳になる少し前にはヴァイオリンを習いはじめました。
高校、そして大学と ピアノは副科の必修科目だったのでピアノのレッスンもずっと続けていたそうです。

高校生の時のこと。副科のピアノの課題曲には難易度によってレベル分けがしてあり、
しかも副科にもかかわらず成績が校内の掲示板に貼り出されたのだとか！
そこで清加さんは…

清加さんが選んだレベルはもちろん最高難度。リストなども弾いていたそう！
なんという負けず嫌い！！
楽会があればいつかは清加さんのピアノをお聞きしたいです♡
←※試験に合格しないと上の学年にはもちろん上がれません。

ひとポイント 負けず嫌いはこんな時にも
小学生の時、百人一首大会をクラスですることなったそう。
もちろん清加さんは…
そう心に決め、その日から夜なお母さまに手伝ってもらい百人一首の練習をつづけ…
大会の結果は 1位ですが!!
この流れは…
ただ、夜の特訓の影響なのか一気に目が悪くなってしまったそう。
「1位…ちょっとも もう練習ないって言ってる」

絶対、勝つ。

負けず嫌いで、努力家、やるからにはとことん！
という清加さんの一面を垣間見ることができるエピソードです。

小学校入学後もヴァイオリンをつづけていた清加さん、小学1年生の時、お母さまと一緒にイツァーク・パールマンのコンサートに行きました。

その時、パールマンがにこにこと笑みを浮かべながら弾く姿、そして、会場にいる全員が彼の音楽の虜になり、観客もにこにこと聴く様子に
この後、「ヴァイオリニストになる。」と両親に宣言。
→そこまで本気なら先生について学ぼうと本格的にレッスンを習うことにしました。

小学4年生の時、神奈川県で行われたコンクールに出場し、1位を受賞。
小学6年生、全日本学生音楽コンクール全国大会小学校の部にて第1位を受賞。

小学6年生の時に1位をいただけたことで、「音楽家の道も、無理なものではないかな。」と思うようになりました。
公立中学へ進学し、高校の進路を考えはじめた時に、両親からは「音楽家は楽な道ではないし、少しでもやりたくない気持ちがあるなら今すぐ（ヴァイオリンを）やめていいよ。」と言われていたのですが、私は「いや、もう絶対やる。」と言って、東京藝術大学付属音楽高等学校の受験を決めました。

東京藝術大学へ入学

音楽人生の転機の1つにもなったという、山崎伸子先生による室内楽のレッスン。

室内楽の授業が結構好きでした。
公開レッスンのような形で、他の組の演奏を聴くことができ、お互いに学び合える雰囲気がありました。振り返ると、そのやり方はどこかMusic Dialogueに近いものだったかもしれません。

未だにスコアにその時のメモがあって懐かしく思うことがあります。

授業の思い出はありますか？

耳を開いてお互いの音を聴き合うことで、相手がその曲をどう捉えているかが自然と伝わってきます。話し合うことはもちろん、音楽の中で生まれる瞬間ごとのコミュニケーションも、とても大切なことです。

今までやってきた室内楽や音楽について考えて来たことをひっくり返されるようなレッスンでした。
山崎先生は物の本質的なものが見えている方なので、カルテット内でもっと深いところまで話し合って欲しかったのだと思います。そしてレッスンの中で「本物の室内楽はこのプロセスを踏まないと生まれない」とも言われて、徐々にですがメンバー内でも本音を言い合えるようになりました。
大学生活の中で最も音楽人生を変えられたカルテットのレッスンだったかなと思います。

印象に残っている授業が もう1つ。
清加さんが入学した年から選択制になったというアンサンブルのレッスン。
通常編成のオーケストラではなく、チェンバーオーケストラを選択。
指揮者の方がヴァイオリニストだったり、指揮を本業とされていないアーティストが指導に来てくださることも多く（国内外から）、そこも魅力的だったそう。

大編成のオーケストラになると、室内楽と全く同様に アンサンブルを行うのは 難しくなりますが、チェンバーオーケストラくらいの小編成のオーケストラになると、室内楽的要素を多く含んだ演奏が 出来るところがあります。
ここでの体験が私のオーケストラの基礎になったかなと思っています。

大学時代は、「室内楽が好き！」という感じで様々な授業を受けていたのでしょうか？

音楽家としてさらに成長し、羽ばたきたいという思いがあったので、それを後押ししてくれるものがここには詰まっていると感じたんです。

東京藝術大学付属音楽高等学校へ進学

ある意味 全員音楽オタクという中に入り、「特殊な学校に来たんだ。」と思ったそうですが、先輩や先生方との距離も近く、あたたかな学校だったと言います。

入学してすぐの頃、廊下から出てきて一人暮らしをしている同級生が、朝から練習室で練習している姿を目にしました。
「音楽を中心に考える人たちの集まりって、こういうことなんだ！」と、その熱心さに大きな衝撃を受けました。

大学時代師事していたプレ先生からも多くのことを学びました。

プレ先生は弾いてくださることで全てを語るような方です。
中でもドビュッシーやラヴェルのようなフランスものの楽曲に関しての室内の描き方は音から こんなに色彩が見えるのかと先生の演奏を聴いてはじめて思いました。豊かで美しい色彩感を学び、それを表現できる音楽家になりたいという目標もできました。

その時はまだ、室内楽が好きだとはわかっていなかったです。
清水高師先生、ジェラール・プレ先生に師事し、ソリストとしての教えを中心に受けていたところに山崎先生にお会いして、室内楽について学びはじめた時「私の人生が変わってきた」とどこかで感じました。なので得意かどうか、好きかどうかというよりも、音楽家としての人生を考えた時に室内楽を無視して歩むことはできない！と思いました。

次ページへつづく

学生時代、毎年夏はヨーロッパでの講習会に参加。
ヨーロッパ・アメリカ・アジアなど様々な国の素晴らしい先生のレッスンを受ける日々だったそう！

演奏面での学びに加え、ヨーロッパで触れた空気感や色彩感、生活様式や食文化など、あらゆる体験が音楽家としての成長につながりました。さらにレッスンの合間に訪れた美術館では演奏のヒントとなる多くの気づきを得ることができ、それらは今も清加さんにとって大切な財産となっていると言います。
ヨーロッパの演奏会に足を運んだり、現地の音楽家と交流することはこれからも続けていきたいです。

ソロと室内楽、両方ともご自身の中では大切で、同時進行で2つのレールを作っていかれたのですね。「室内楽」をしていく中で、大きな出会いだったとお話されていた 大山平一郎さんとの出会いはどんなものだったのでしょうか？

初めて会ったのは大学卒業後の23歳の時、なんと大阪にあったおばんざい屋だったのだとか！

その時のお話の中で「こういうのがあるよ」と大山さんに紹介いただいて、翌年くらいのシャネルの室内楽シリーズで初共演させていただきました。

オーケストラでは2〜3日間という限られたリハーサル時間の中で、全員でひとつの形にしていかなくてはなりません。
シャネルの室内楽シリーズでは大山さんがリーダーとしてのアンサンブルの「音のつくり方」「時間の使い方」「ザッツの仕方」（音を出す瞬間を合わせるための合図）「みんなをひっぱる息づかい、弓の動き、身体の動き」などについて、徹底的にご指導いただきました。

大山さんがいつも質問を投げかけてくださったおかげで、自分が今どう考えているのかを自然と言葉に出来るようになり、一緒にいる人ともより深い部分まで共有できるようになりました。

その他にも…
- 楽譜に込められた作曲家の意図、メッセージを深く読み込むこと。
- 一つの作品をどういう構成で仕立てるのか。

といったことを教えていただきました。
また、大山さんが共演されたという、私にとって雲の上のような存在の巨匠達の言葉もたくさん話してくださいました！

大切にしていること

清加さんが音楽家として大切にされている1つがコンディションづくり。

演奏会で全力を出し切るためには、心身共に健やかであることがとても重要です。常にベストな状態で演奏に臨むためにも身体との向き合い方が大事だと、10年ほど前から、食事・睡眠・運動に気をかけるようになりました。

音楽家はアスリートと似ているところがあると思っています。体づくりだけでなく、メンタルトレーニングも欠かせません。
自分が健やかである事、そしてそのためのケアを怠らないことは、プロとしての大切な責任だと考えています。
音楽家には自分自身の体と心についてもよく理解し、自分の事をもっと知ってほしいと思います。

自分の体の事を知るためにもヨガやピラティスも習慣的に取り入れているそう。
自分の内面に意識が向く事でどう体を使えばケガをしにくいのかということもわかってきて、それと同時に僅かな不調にも気付けるようになりました。

卒業後、ゲストコンサートマスターとして各地のオーケストラに行く機会があり アシスタントコンサートマスターとして2回ほど共演していた日本フィルハーモニー交響楽団から誘いをいただき 2014年に入団。
現在、日本フィルハーモニー交響楽団 アシスタント・コンサートマスター として活躍されています。

入団当初は団員の中でも年齢が下から3番目という若手の立場でしたが、今では若い世代も増え、顔ぶれも随分変わってきました。
日本フィルのカラーを次世代へと受け継いでいくために、後輩へ伝えていくことが、今の自分の役割りでもあると感じています。

「伝えることは「教える」ということにも繋がると思うのですが教えることについてはどういう感覚を持たれていますか？

オケでは特に、短い時間で順備をするので「感覚的に弾いている」時が良くあったなと教えながら気づきました。
言語化することで、感覚から言葉になり再現性が生まれます。
「あ！良い言葉で伝えることができた！」と思った時は譜面に書いておく事もあります。

これから

清加さんにこれからのことを伺ったところ、「大きな目標があり、そこへ向かって進んでいるというよりは、今やっている事（活動）を深めていきながら、人間的な部分も深めていきたい。」と回答をいただきました。

20代の頃
演奏家として壁にぶつかり、一度、音楽をやめようと思った時があったそう。
そのつらく苦しい所から再びこの世界に戻ってこれたのは『音楽』のおかげだと言います。

心配してたくさんの方が演奏会にさそってくださって、

音楽を通して社会の役に立ちたいという考えは今も変わりません。私が小さい頃にパールマンの演奏を聴いて「ヴァイオリニストになりたい。」と言ったように、人生の時間とお金を費やして演奏会に来てくださった人の中につらい経験をしている人がいたとして、演奏を聴いたことで元気とまではいかなくても「希望」を見出したりしていただけたら良いなという気持ちを常に持っています。
その為にも、すべての演奏会で全力を出したいですし、常にそれを実現できる人でありたいです。

音楽が人を救う力ってこんなに大きいものなのかと思い、音楽を仕事としてやっているならば、音楽を通して人の役に立てることがあったら良いなという考えに変わりました。

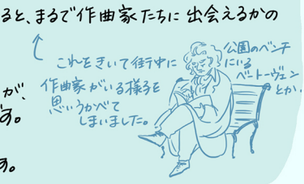
人生の考え方が変わったのですね！

最後に清加さんは誰にも言ったことがないという、これからの夢についてもお話くださいました。

「ウィーンにいつか住みたい。」という夢。

人生の目標にもなっている夢です。
私の人生において大切にしているものの1つに『旅』がありますが、20代後半から世界各地を旅していた時に訪れたオーストリア・"ウィーン"の街に恋をしたんです。

クラシック音楽は再現芸術であり、作曲家が楽譜に込めた思いや意図をどれだけ読み取れるかが重要です。ウィーンの街を歩いていると、まるで作曲家たちに出会えるかのような空気を感じました。
彼らが生きてきた時代が今もなお息づいていて、音楽をする上で直面する悩みや問題を解決するヒントが、街のあちこちに散りばめられているように思えたのです。
音楽家として、いつかヨーロッパの地でも演奏し、活動を広げていくことが私のこれからの夢であり目標です。



清加さんの"これから"と海外への想いを伺い、音楽家としてのさらなる羽ばたきを応援したいと思いました。貴重なお話をありがとうございました！

絵と文 Sumire AKASAKA